

保育者養成における「保育法演習」のマイクロティーチングに関する一考察

植 草 一 世

Study on Microteaching in “the Seminar on Methods of early childhood education” for the preparation of kindergarten and childcare teachers

1、はじめに

「保育法演習」は、教育・保育実習の事前事後指導である「演習」に加え、実習関連教科と、行事を通して実習的体験の機会を増やそうとするものである。そして学生の意識付けを2年課程の中で明確にすることにより、保育者養成のより効果的な実習のあり方を検討した（植草ら 1995）⁸⁾（植草ら 1997）⁹⁾（植草ら 1998）¹⁰⁾（松原ら 1998）⁶⁾（松原ら 1999）⁷⁾（植草ら 2000）¹¹⁾。

筆者は、幼稚園教育要領「第二章 ねらい及び内容」の「自然体験、社会体験などの直接的、具体的体験を重視する」と、保育所保育指針の『(7)幼稚園教育要領と同様に5領域を維持するとともに、「生きる力の基礎を育てる」や「自然体験、社会体験の重視」等幼稚園教育要領の改定内容と整合性を図った。』に注目する。要するに現代の幼児を取り巻く環境が、間接的 非具体的な情報に満ちていること。家庭や路地など、保護者の側からあまり遠くない距離に、安心できる遊び場が消失してしまった今、家の中での遊びが中心とならざるを得ない。放っておけばたちまちテレビやテレビゲームをはじめとする映像や音響に取りつかれたようになってしまう。それらは幼児の興味を引きやすいため、簡単に幼児を受け身一方の存在にしてしまう。しかし人間として「生きる力」を培わなければならない幼児期にとってこれは大変危機であると考え。これを受けて保育者養成という観点から、教育に関する理論的な研究や、より専門性を求めるだけでなく、「生きる力の基礎を育成する」「自然体験、社会体験など直接的、具体的体験を重視する」ということを検討し、人間として幅広い教養を身につけることも課題とする。

教育・保育実習では、講義などで学んだ理論や知識を実践し、その理論や知識を学生自身の幼児観や教育観と結び付けて統合的に体得することができる。それゆえ、教育・保育実習は教員養成にとって欠くことのできない重要な教育課程であり、その教育効果を高めるため実習前後の指導が重要となってくる（金子ら 1995）³⁾。実習の教育効果が大きいことは小館ら（1977）²⁾、井上（1987）¹⁾などの研究でも示されているが、実施にあたっては実習先の負担は非常に大きいので、養成校側では実習先での実習指導の負担を軽減するべく、事前指導を充実させなければならないと考える。教育技術の習得は実習先における教育実践によるところが大きいですが、本来、基本的な教育技術は実習前に養成校内で実践可能な状態に習得しておくことが望まれる（金子ら1995）³⁾。マイクロティー

チング（MT）は、金子ら（1995）³⁾（1997）⁴⁾（1999）⁵⁾によりその活用に際して指導目標、内容、時間、幼児数できる限り縮小することによって、指導技術に含まれる様々な要因を明確にし、幼児の経験やあり方を詳細に検討された。

2年次の実習で実習生は、毎日の保育の流れの一コマに組み込まれているプログラムを担当したり、日によって変わるあるまとまった活動を担当したり、子どもを個別に、あるいはグループ、クラスとして担当したり様々である。そして、実際の実践である指導案作成に向けて内容、ねらい、手順、子どもの能力、時間差、時間配分などについて学んでいかなければならない。そして保育活動の手順、教材研究、そして何のためにそれをしようとしているのかについてのねらいに短期間に周到な検討を行わなければならない。そこで1年次の参加観察実習を終えた学生に、以上のことを実習前に情報として与え、予測して行うのがMTである。

今まで、何人かの研究者や指導教官が幼児教育だけでなくMTを実施してきたが、筆者は学生の育ちをふまえたこの時期に実施されることを強く主張したい。その意味で、このMTは、提案型の指導計画に特に有効と考え、指導法的実習に有効と考える。保育法演習での目的は、「環境を通して行う教育について」「指導計画・教材研究の必要性」「指導計画の考え方」「実習体験をもとに保育内容の理解」「幼児の生活の実態・興味関心理解」「幼児一人一人の具体的なねらいを考えた援助方法」「指導計画の実践と観察・記録・評価・反省」を上げる。

保育者養成校であるU校では「保育課程総論」の授業の中でMTを実施した。保育課程総論は、1年次後期（10月～翌年3月）に受講される。幼児の特質をふまえ、幼稚園教育・保育所保育の内容を理解し、幼稚園における教育課程・保育所における保育計画の意義を明確にする。実際に、部分実習・参加実習・1年次の教育実習、保育実習で指導案の必要性を感じそこで得た情報を基に、子どもの興味関心を知り指導案作成をする。MTを経験することによって、保育の準備、言葉掛けの工夫等、多方面から子どもとの係わりを研究、考察していき、保育者としての資質を養う。

また、実習担当教員としてMTは教育技術に含まれる様々な要因を明確にした上で、きわめて単純化された場面でそれらを訓練することができるという利点があることを実証されている。MTの活用に際して指導目標、内容、時間、幼児数をできる限り縮小することによって幼児の経験や活動のあり方を詳細に検討することができる（金子ら、1995）¹⁾。金子ら（1997）³⁾は、訓練期間と、手続きをMTの別にもうけたが、保育法演習の中で行うMTは、手続きをもMTとし、学生の意識付けを明確をにしようとするものである。保育法演習は、1年入学時より開始するが、それは保育法演習と言う授業が設定されているわけではなく、各教科・行事のそれぞれの幅広い特長の中に実習という方向性を見だし、学生の育ちに配慮しながら実習の目的を教育実習 演習のみならず、関連教科・行事が共有し、体験の機会を多くする事を目指した（植草ら 2000）¹⁰⁾。保育法演習でのMTは、その導入から実施、そしてまとめまでをMTした。

2、目的

幼稚園教育 保育実習の事前指導の一環としてMTを1992年から2000年まで9回保育者養成校の1年次女子学生を対象に実施したその内容をまとめ、保育法演習でのMTの紹介と、実際に実習でどのような効果を発揮したのか調査し実習効果を報告する。

3、方法

(1) 被験者

千葉市にある2年課程の保育者養成校1999年4月に入学しMTを経験した女子学生106名

(2) 受講期間

1999年10月から2000年7月まで。

その間に1999年10月 幼稚園教育実習 参加観察実習 1週間、11月 保育実習 参加観察実習 1週間、2000年2月に附属幼稚園にてMT実施した。

2000年5月下旬から6月にかけて千葉県を中心に幼稚園での実習3週間7月に2週間の保育実習が行われた。

(3) 調査期日

- ・ 1回目1999年11月 1年次 幼稚園観察参加実習後 アンケート調査及び感想文 回収率100%
- ・ 2回目2000年1月 1年次 保育所参加観察実習終了後アンケート調査及び感想文 回収率100%
- ・ 3回目2000年7月 MT受講後2年次本実習終了後 アンケート調査及び感想文 回収率100%

(4) 調査内容

①1回目の調査では、初めての实習体験直後の学生に、「幼稚園実習での部分実習の経験と部分実習の回数、部分実習を経験しての感想、2年次の責任実習に向けて勉強した方がよいこと。」を書いてもらった。

②2回目の調査は、幼稚園・保育所の二つの実習を経験後、2年次になって1日実習を課題として与えられた場合の自信について。1年次で部分実習を経験したかどうか。部分実習経験者に良い・やや良い・やや悪い・悪いの4段階に自己評価をしてもらった。

③3回目の調査では2年次の実習終了後、責任実習の主な活動の内容。MT受講後本実習を経験した学生が、MTが有効と感じた内容を自由筆記に、部分実習について良い・やや良い・やや悪い・悪いの4段階に自己評価をしてもらった。

④2回目調査と3回目の結果を比較検討してMTの効果を検討する。

(5) MTの実施手続き

①被験者：千葉市の保育者養成校1年次 女子学生全員2クラスをそれぞれ約7人グループ10班を編成する。

②対象幼児：附属幼稚園3歳児4歳児5歳児を学年構成で10グループ編成する。

- ③その際できるだけ人数、男女、発達的に等質になるよう配慮する。
- ④監督者：附属幼稚園教諭6名により担当する。園児のクラス担任は優先的にクラスに配属しその他に副園長、主任が配属される。1回のMTに一人が1～2グループを担当する。
- ⑤実施日：幼稚園のその年度の行事等配慮しながら年間計画により1月下旬～2月上旬に設定している。
- ⑥時間：幼児の生活上できるだけ支障のない時間を考慮する。ここ数年は、午前11時から12時までを設定して

(6) MTの受講内容と具体的内容を簡単に上げる。

- ①担当教員（筆者）による指導案作成の講義を受ける。
- ②各自作成した指導案を元に、班別に話し合いMTの指導案を作成する。
- ③指導者（1名）、補助指導者（1～2名）、観察者（2～3名）を話し合いにより選出する。
- ④MT対象幼児（年齢・人数）、担当教諭を知る。
- ⑤受け入れ園教諭による子どもの状況、クラスの様子等講義を受ける。
- ⑥監督者からの指導助言を受ける。
- ⑦指導案に沿って教材研究を行う。
- ⑧監督者による指導案添削、指導を受ける。
- ⑨添削をしてもらった指導案を修正をする。
- ⑩対象幼児のクラスを中心に、部分観察参加実習を行う。名前の確認。MTの指導案のねらいが対象幼児の発達にあっているか確認する。対象幼児の人数の関係上、被験者を2回に分けて実施する。
- ⑪部分観察実習で得た情報により、最終指導案を作成する。
- ⑫指導案を班員と監督者に配付し共通理解を図る。
- ⑬MT実施：記録学生による観察.監督者の観察.ビデオテープで保育状況を収録。
- ⑭観察記録のビデオ視聴し記録の確認をする。
- ⑮記録用紙：反省用紙を作成する。
- ⑯問題点検討のため学生同士の反省会を行う。
- ⑰学生と監督者の反省会指導を受ける。
- ⑱全学生にMTの指導案を配付し、共通理解を図る。全員が印刷機の使用方法を知る。
- ⑲担当教員による総評を行う。

4、結果

<1回目アンケートについて>

- (1) 幼稚園実習での部分実習経験者は、106名のうち97名（92%）である。
経験回数は、0回～22回と実習園によって様々であるが、一人平均5回弱余である。

(2) 部分実習の内容は表1のとおりである。

表1

	回数 (%) 複数回答あり
自己紹介	118回 (12.2%)
手遊び	127回 (22.8%)
絵本・紙芝居	124回 (22.3%)
歌・ピアノ	41回 (7.4%)
生活	95回 (17.0%)
その他	52回 (9.3%)
計	557回 (100%)

(3) 部分実習を経験しての感想を項目別にまとめ、上位を取り上げる。

緊張感と、達成感、喜びをを味わうことができた。緊張してうまくできなかった。先生を体感した。先生の大変さがわかった。子ども達の反応が直接感じられた。共感できた。子どもの頭は思っていたより大きくて衣類の着脱が大変だった。自己紹介・手遊びによって子ども達に親しまれた。観察実習よりも、子ども達と多く接することができた。絵本等の教材の選び方を失敗の体験をして実感としてわかった気がする。紙芝居を読んで「先生速い」と言われて実感した。導入の方法がわからなかった。準備不足を感じた。手遊び一つも思い浮かばなかった。絵本をつかえた。何を話しているのかわからなかった。ゆとりがなく子どもの反応に答えられなかった。子どもを集中させる方法がわからなかった。静かにしてもらうことができなかった。子どもの質問にどのように答えたらいいかわからなかった。軍手人形を使っでの導入は、準備不足で思うようにいかなかった。一人一人の気持ちがあくみ取れず、飽きてしまう子がいた。どのような言葉遣いをしていいのかわからなかった。時間配分がわからず時間をとりすぎた。担任の先生を頼っている自分がいた。自立していないと思った。次はもっと頑張りたいと意欲がわいた。次に行くための反省点・改善点を見つげられた。責任実習に向けてなにを勉強した方がいいのか目標ができた。

(4) 2年次の責任実習に向けて勉強した方がよいことを項目別にまとめ上位を取り上げる。

話し方、手遊び紙芝居の読み方、ピアノ等保育技術の習得。子どもの興味関心を知ること。先生としての言葉遣い。導入の方法。指導案の書き方。スムーズに保育できるように計画を立てたい。精錬実習の仕方。保育の教材研究。事前準備、心の準備をしてゆとりを持ちたい。集中してもらう方法。歌、手遊び、遊びをたくさん知る。子どもと接してみてもわかることが多いので、子どもと接する機会を多く持ちたい。年齢の差があっても遊べる遊びの研究。けんかの仲裁、しかり方等しっかりでき先生としての信頼を得るようにしたい。

<2回目アンケートについて>

(1) 2年次になって1日実習を課題として与えられた場合の自信については表2のとおりである。

表2

自信がある	1人 (1%)
やや自信がある	9人 (8%)
やや自信がない	48人 (45%)
自信がない	48人 (45%)
計	106人 (100%)

自信がある、やや自信がある人は、10人 (9%)、自信がない、やや自信がない人は96人 (90%)にも及んでいる。

(2) 部分実習経験者の部分実習の自己評価

1年次実習終了後と、2年次実習終了後との比較を(5)で行う。

1年次部分実習経験者は、失敗と感じた感想が多かったものの実習に対して自分自身の問題がはっきりしており、2年生の本実習に向けて何を勉強したらいいかということが、具体的になってきている。そこでMTを実施し、責任実習を経験する。

<3回目アンケートについて>

(1) 実際に、MTが役立ったと思う部分実習は幼稚園だったか、保育所だったか。

表3

幼稚園	71人 (67%)
保育所	35人 (33%)
計	106人 (100%)

(2) 何歳児クラスの実習だったか。

表4

5歳クラス	52人 (49%)
4歳クラス	30人 (28%)
3歳クラス	13人 (12%)
2歳クラス	8人 (8%)
1歳クラス	3人 (3%)
0歳クラス	0人 (0%)
計	106人 (100%)

(3) 主な活動の内容

表5

工 作 遊 び	66人 (62%)
ルールのあるゲーム的遊び	24人 (23%)
身体表現遊び	9人 (8%)
お 絵 か き 遊 び	5人 (5%)
歌 遊 び	1人 (1%)
自 由 遊 び	1人 (1%)
計	106人 (100%)

(4) MTを経験し本実習に望んでMTが役だったと思うことを項目にまとめ上位を上げる。

導入の方法が理解でき、準備ができた。責任実習の時はあまり緊張せずにできた。余裕が持てた。雰囲気がかめた。ねらいの立て方、指導案の書き方がわかった。子供の前に立つことが恥ずかしくなかった。指導案の必要性がわかった。子どもの反応が予測できた。年齢によってどのくらいできるのか予測できた。子どものテンポを理解できていた。子どもに話しかけることがスムーズだった。遊びの発展ができたと思った。実際指導案通りにいかなかったが、変更してできた。準備の必要性がわかった。声を大きく、笑顔で話すよう心掛けた。子供の話を聞くことができた。子供の前では、どんなことがあっても笑っていられた。自分自身が積極的になれた。研究を活用できた。子どもの予想外の行動への対応が良くなった。子供と接する機会が多い方が、安心で良かった。自分自身の力がついたと感じる。一人一人が違うことが理解できていた。どのようにすれば子どもに伝わるのか予測ができた。自分自身が楽しめた。自分自身が何もわかってないことを知った。記録係だったので特にない。

(5) 1年次実習後とMT受講後の2年次実習終了後部分実習の自己評価の比較

表6

	1年時間察参加実習終了後				2年次本実習終了後			
	良い	やや	やや	悪い	良い	やや	やや	悪い
	良い		悪い		良い		悪い	
指導案の内容を把握していたか	98人 (93%)		7人 (7%)		43人 (41%)	55人 (52%)	7人 (7%)	0人 (0%)
指導案の内容は充実していたか	93人 (89%)		11人 (11%)		18人 (17%)	75人 (72%)	10人 (10%)	1人 (1%)
手順は良かったか	2人 (2%)	30人 (29%)	58人 (56%)	13人 (13%)	7人 (6%)	74人 (70%)	25人 (24%)	0人 (0%)
	32人 (31%)		71人 (68%)		81人 (76%)		25人 (24%)	
予想外の幼児への対応はよかった	2人 (2%)	26人 (25%)	63人 (61%)	12人 (12%)	4人 (4%)	50人 (47%)	51人 (48%)	1人 (1%)
	28人 (27%)		75人 (73%)		54人 (51%)		52人 (49%)	
余裕はあったか	0人 (0%)	13人 (12%)	51人 (50%)	39人 (38%)	1人 (1%)	51人 (48%)	47人 (44%)	7人 (7%)
	13人 (12%)		90人 (88%)		52人 (49%)		54人 (51%)	
言葉掛けは適切だったか	4人 (4%)	47人 (45%)	46人 (45%)	6人 (6%)	15人 (14%)	71人 (67%)	19人 (18%)	1人 (1%)
	51人 (49%)		52人 (51%)		86人 (81%)		20人 (19%)	
指導の修正はできたか	0人 (0%)	12人 (12%)	64人 (62%)	27人 (26%)	8人 (8%)	62人 (58%)	34人 (32%)	2人 (2%)
	12人 (12%)		91人 (88%)		70人 (66%)		36人 (34%)	
個別指導はできたか	0人 (0%)	29人 (28%)	47人 (46%)	27人 (26%)	18人 (17%)	57人 (55%)	28人 (27%)	0人 (0%)
	29人 (28%)		74人 (72%)		75人 (72%)		28人 (27%)	

	1年時間察参加実習終了後				2年次本実習終了後			
不参加児への対応はよくできたか	2人 (2%)	25人 (24%)	60人 (58%)	16人 (16%)	25人 (24%)	46人 (43%)	30人 (28%)	5人 (5%)
	27人 (26%)		76人 (74%)		71人 (67%)		35人 (33%)	
問の使い方	1人 (1%)	20人 (19%)	71人 (70%)	10人 (10%)	12人 (11%)	59人 (56%)	32人 (30%)	3人 (3%)
	21人 (20%)		82人 (80%)		71人 (67%)		35人 (33%)	
子どもを集中させる力	4人 (4%)	25人 (24%)	58人 (56%)	16人 (16%)	8人 (8%)	65人 (61%)	30人 (28%)	3人 (3%)
	29人 (28%)		74人 (72%)		73人 (69%)		33人 (31%)	
タイミング	0人 (0%)	26人 (25%)	65人 (63%)	12人 (12%)	3人 (3%)	62人 (60%)	38人 (37%)	0人 (0%)
	26人 (25%)		77人 (75%)		65人 (63%)		38人 (37%)	
子どもの発言の取り上げ方	2人 (2%)	42人 (41%)	47人 (46%)	11人 (11%)	13人 (12%)	62人 (59%)	30人 (29%)	0人 (0%)
	44人 (43%)		58人 (54%)		75人 (71%)		30人 (29%)	
ほめ方	3人 (3%)	53人 (51%)	41人 (40%)	6人 (6%)	29人 (27%)	68人 (64%)	8人 (8%)	1人 (1%)
	56人 (54%)		47人 (46%)		97人 (91%)		9人 (9%)	
しかり方	0人 (0%)	10人 (10%)	64人 (62%)	29人 (28%)	4人 (4%)	48人 (46%)	50人 (48%)	3人 (2%)
	10人 (10%)		93人 (90%)		52人 (50%)		53人 (50%)	
子どもの発想の尊重	4人 (2%)	49人 (48%)	43人 (42%)	7人 (8%)	24人 (23%)	63人 (61%)	17人 (16%)	0人 (0%)
	53人 (50%)		50人 (50%)		87人 (84%)		17人 (16%)	
主体性	4人 (2%)	49人 (34%)	43人 (50%)	7人 (14%)	20人 (19%)	71人 (68%)	13人 (12%)	1人 (1%)
	53人 (36%)		50人 (64%)		91人 (87%)		14人 (13%)	
子供の気持ちの理解	3人 (2%)	49人 (48%)	51人 (50%)	0人 (0%)	18人 (17%)	74人 (70%)	14人 (13%)	0人 (0%)
	52人 (50%)		51人 (50%)		92人 (87%)		14人 (13%)	
先生としての態度、言葉使いは適切だったか	1人 (1%)	44人 (43%)	54人 (52%)	4人 (4%)	14人 (13%)	74人 (70%)	18人 (17%)	0人 (0%)
	45人 (44%)		58人 (56%)		88人 (83%)		18人 (17%)	
子ども達の位置は配慮があったか	14人 (14%)	56人 (54%)	29人 (28%)	4人 (4%)	24人 (23%)	64人 (60%)	16人 (15%)	2人 (2%)
	70人 (68%)		人 (%)		88人 (83%)		18人 (17%)	
指導者の位置は配慮があったか	12人 (12%)	56人 (54%)	28人 (27%)	7人 (7%)	26人 (25%)	66人 (63%)	10人 (10%)	3人 (3%)
	68人 (66%)		35人 (34%)		92人 (88%)		13人 (13%)	
人的環境の意識があったか	2人 (2%)	25人 (24%)	53人 (51%)	23人 (22%)	17人 (16%)	71人 (68%)	15人 (14%)	2人 (2%)
	27人 (26%)		76人 (73%)		88人 (84%)		17人 (16%)	
環境設定はしっかりできたか	1人 (1%)	42人 (40%)	46人 (45%)	14人 (14%)	28人 (26%)	57人 (54%)	19人 (18%)	2人 (2%)
	43人 (41%)		60人 (59%)		85人 (80%)		21人 (20%)	
教材教具の準備はよくできたか	12人 (12%)	33人 (32%)	49人 (48%)	9人 (8%)	48人 (46%)	38人 (36%)	18人 (17%)	1人 (1%)
	45人 (44%)		58人 (56%)		86人 (82%)		19人 (18%)	

以上の表に示されているように、1年次参加観察実習終了後は悪いと自己評価しているのに対して、2年次は本実習終了後はほとんどが良いと評価している。1年次と2年次本実習終了後では、当然2年次の方が良い結果が期待される。結果は、2年次がすべての項目に顕著に良い結果が現れた。

5、まとめと考察

参加観察実習である幼稚園・保育所実習、責任実習である幼稚園・保育所実習の4回の実習の前後に3回のアンケート調査を行った。最初の幼稚園実習での感想は、ほとんどの学生にとって初めての实習経験のために、「子ども達の反応が直接感じられた。共感できた。緊張感、達成感、喜びを味わうことができた。先生を体感し、大変さがわかった。」等、新鮮で感動を表した内容が多かった。1年次の部分実習は、養成校側は特に課題として提示してあるものではないが、実習受け入れ園側の指導により、1年次であっても幼稚園、保育所の両実習はどちらかで部分実習を経験している。実習園によって、内容の差、時間の長短の差、内容の軽重の差はかなりある。部分実習の経験回数は、0回～22回と実習園によって様々であるが、平均一人5回弱の部分実習を経験させてもらっている。部分実習の内容は、「自己紹介、手遊び、絵本、紙芝居、歌、ピアノ、生活、その他」と短時間に、初心者にやりやすい内容を実習先では、学生に提供しているようである。しかしそれにも係わらず、部分実習は、子ども達と自由に遊んだり生活の補助とは違い、実習生自身の積極的な活動が求められるため、評価の対象になることを意識してか、緊張感やプレッシャーを多く感じたい。「準備不足を感じた。手遊び一つも思い浮かばなかった。絵本読みをつかえた。何を話していいのかわからなかった。ゆとりがなく子どもの反応に答えられなかった。緊張してうまくできなかった。子どもを集中させる方法がわからなかった。静かにしてもらうことができなかった。子どもの質問にどのように答えたらいいかわからなかった。準備不足で思うようにいかなかった。一人一人の気持ちがかみ取れず、飽きてしまう子がいた。どのような言葉遣いをしているのかわからなかった。時間配分がわからず時間をとりすぎた。自立していないと思った。」等、多くの反応が返ってきた。もちろんマイナスの反応だけでなく、たった1週間の経験であるが、ここでの実習は、「次に行うための反省点・改善点を見つけられた。本実習に向けてなにを勉強した方がいいのか目標ができた。絵本等の教材の選び方を失敗の体験をして実感としてわかった気がする。観察実習よりも、子ども達と多く接することができた。次はもっと頑張りたいと意欲がわいた。」等、意識付けができており、やる気が感じられる。自分に欠けている事柄が発見できており、何を勉強したらいいのかが具体的に見えてきている。2年次の本実習に向けて勉強した方がよいこととして、「話し方、手遊び紙芝居の読み方、ピアノ等保育技術の習得。先生としての言葉遣い。指導案の書き方。スムーズに保育できるように計画を立てたい。保育の教材研究。」が指摘されている。1年次部分実習経験者は、失敗と感じた感想が多かったものの実習に対して自分自身の問題がはっきり

しており、2年生の責任実習に向けて何を勉強したらいいかということが具体的になってきている。筆者は、この機を逃がさず学生の要望に応えることが大切であると強く主張したい。そして、幼稚園・保育所の二つの実習を経験後、2年次になって1日実習を課題として与えられた場合の自信については、自信がある学生は10人（9%）自信がない学生は96人（90%）にも及ぶ。ほとんどの学生が大なり小なり不安を持ち、講義形態の受け身の授業だけでは解決しにくいと理解する。ここでMTを受講することによる、MTの実習の効果は以上の結果に示されているように大きい。MT経験後の学生は、責任実習に向けて大変積極的に準備を行っている。責任実習のために予想した指導案を何種類か書いていたりそれに併せて教材研究も行っている。事前訪問時には、学生は具体的にどのような実習をしたいのかということ指指導案を持参する事によって実習目的を実習園の指導者に伝える一資料として示すことができる。もちろん実習園の都合や、子どもたちの状況に合わせて形は変えていかなければならない。が、自分自身がどのような実習をしたいかがわかっているということは緊張せずに余裕をもって、実習園の雰囲気をつかむことが可能になると思う。

MTの問題点として、一般の実習と同じようにMTの実施期間、受け入れ幼稚園・保育所には制限がある。多くの時間、回数、対象幼児の人数などあまりゆとりがないことが上げられる。学生全員の指導的立場の体験と、数回繰り返していくことの必要性を感じている。学生が幼児の役割をするようなシュミレーション的に行うことも考えたが、小学校以上の授業のためのMTと違って、「遊びを通しての保育」の予想できない幼児の反応こそ保育体験の価値ある貴重な部分と考える。

保育者養成校の実習担当として、幼児と係わる体験こそが、まずは「自然体験、社会体験などの直接的、具体的体験を重視する」と、「生きる力の基礎を育てる」ことにつながると考えており、今後も、本研究を継続し「保育法演習」のあり方を検討していきたい。

引用・参考文献

- 1) 井上 勲 (1987) 保育学生の意識－入学の動機と卒業後の進路について保育者養成保育学年報 1987年版 日本保育学会、39－48.
- 2) 小館静枝・西方 栄・今村迪子 (1977) 短大における「実習」の現状と課題 小田原女子短期大学研究紀要、8、75－95.
- 3) 金子智栄子・鈴木朱美・三浦香苗 (1995) 幼稚園教員養成課程におけるマイクロティーチングの研究Ⅰ 日本教科教育学会誌、第18巻 2号、19－24.
- 4) 金子智栄子・三浦香苗 (1997) 日本教科教育学会誌 幼稚園教員養成課程におけるマイクロティーチングの研究Ⅱ 日本教科教育学会誌、第20巻 第1号 27－32.
- 5) 金子智栄子 (1999) マイクロティーチングにおける事前指導強化型とフィードバック強化型の学生指導方法についての比較 日本教科教育学会誌、第22巻1号、11－17.
- 6) 松原敬子・植草一世 (1998) 教育実習 演習の実践的研究Ⅳ 日本保育学会 第51回大会研究

論文集 406-407.

- 7) 松原敬子・植草一世(1999) 教育実習 演習の実践的研究Ⅴ 日本保育学会 第52回大会研究論文集 368-369.
- 8) 植草一世・加藤ヤツヨ・松原敬子(1995) 教育実習 演習の実践的研究 日本保育学会第48回大会研究論文集 408-409.
- 9) 植草一世・松原敬子(1997) 教育実習 演習の実践的研究Ⅱ 研修旅行について 日本保育学会第50回大会研究論文集 540-541.
- 10) 植草一世・松原敬子(1998) 教育実習 演習の実践的研究Ⅲ 日本保育学会 第51回大会研究論文集 404-405.
- 11) 植草一世・松原敬子(2000) 保育者養成における「保育法演習」の研究 植草学園短期大学紀要創刊号、23-39.